

サンプル吸引エラーを起こした過粘稠度症候群の1例

©木村 依利愛¹⁾、山田 明輝¹⁾、河野 克海¹⁾、柳 政希¹⁾、木幡 未奈美¹⁾、橋倉 悠輝¹⁾、緒方 良一¹⁾、猪崎 みさき¹⁾
宮崎大学医学部附属病院¹⁾

【はじめに】

過粘稠度症候群は血液粘度が上昇することにより、血流障害が起き、出血傾向、神経症状、眼症状などを生じる。原発性マクログロブリン血症や多発性骨髄腫で多く認められるが、過粘稠度症候群は自己免疫疾患やその他の疾患でも起こることが報告されている。今回、血清の粘稠度上昇が原因で、生化学自動分析装置でサンプル吸引エラーを起こした症例を経験したので報告する。

【症例】

80歳代男性。転倒した際に口元を怪我して前医を受診したが、止血困難のため本院を受診した。初診時検査において、生化学自動分析装置でサンプル吸引エラーを起こしたため、再遠心後に再検査を実施したが、再び吸引エラーが発生した。血清性状を観察するとやや粘稠性があったため、主治医に確認後、電解質項目以外は、血清を希釈測定し報告した。TP 10.62g/dL、Alb 2.06g/dL とグロブリンの増加が認められ、IgG 3,304mg/dL、IgA 4,396mg/dL、IgM 35mg/dL と IgG・IgA の異常高値を認めた。血液疾患や自

己免疫性疾患が疑われたが、自己抗体の検査で抗 SS-A 抗体が陽性であったことからシェーグレン症候群と診断された。

【考察】

過粘稠度症候群は一般的に IgM によるものが多く、これは他の免疫グロブリンと比較して IgM の分子量が大きいことで血液粘度が上昇しやすいことが原因とされている。分子量の小さい IgA では、フィブリノゲンと複合体を形成することで過粘稠度症候群を呈した症例が報告されており、本症例も IgG および IgA が何らかの物質と複合体を形成していると考えられた。また今回、血清の粘稠度が高く、生化学自動分析装置でサンプル吸引エラーを起こしたが、希釈して粘稠度を下げることで測定が可能になった。サンプル吸引エラーの際には、フィブリンの析出以外にも、過粘稠度症候群などの粘性異常によるエラーがあることを考慮することが重要であると考えられた。

連絡先:0985 (85) 1870